

クラッシュ・ブレイズ

逆転のクレヴァス

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくするには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

D 挿 口
T 画 絵
P

ハ 鈴
ン 木
ズ ・ 理
ミ ケ 華

1

チャイムに呼ばれてマーシャル夫人が玄関の扉を開けると、優しい面立ちの、二十歳くらいの青年が立っていて、軽く頭を下げてきた。

「初めまして。ルーファス・ラヴィーと言います。

亡くなったお嬢さんのことで伺いました」

夫人の顔色がさっと変わった。

突然なくした娘を忘れる母親はいない。

しかし、思い出すのも辛いと感じているとしたら、娘を失った悲しみから懸命けんめいに立ち直ろうとしている最中さなかであるなら、見知らぬ客に詮索せんさくされたくないと考えるのは当然と言える。

お帰りください、と反射的に言おうとした夫人を押しとどめたのは青年の横にいた子どもの声だった。

「カレンはわたしと一緒にでした」

雪のような銀髪で、顔立ちは天使のように美しく、声も優しく口調も穏やかである。

女の子にしか思えないが、その表情に滲にじむ何かが相手が少年であることを夫人に悟らせた。

「あの子と一緒にだった？」

「はい。シエラ・ファロットと申します」

丁寧ていねいに名乗って、少年は続けた。

「わたしもあの河原にいて濁流だくりゅうに流されたんです。本当はもっと早くお伺いするべきでしたが……」

青年が控えめに口を出す。

「ぼくたちは連邦大学から来ました。この子は救助された後すぐに向こうに運ばれて、それからずっと入院していたんです。退院した後も学校がなかなか渡航許可を出さなくて……あんな事件の後ですから当然ですけど、それで遅くなりました。こちらには手紙か何かでお知らせしたらと言ったんですけど、どうしても自分の口からご両親にお嬢さんのことを

お話ししたいと言うものですから」

マーシャル夫人は息を呑んで少年を見つめていた。彼女の娘は数ヶ月前、川で溺れて死んだ。友達は何も一緒にいなかった。今までそう思っていた。

カレンの死は事故として処理されている。

しかし、勝手な憶測をさも事実であるかのように言う連中はどこにでもいるもので、最近になって、一部の週刊誌がカレンは自殺だと報道したのだ。

カレンが合宿に行くとき嘔吐して家を出たこと、水が嫌いで川には減多に近寄ろうとしなかったのに、川で溺れたことなどからだ。

小さな扱いの記事だったが、カレンの両親はこの記事に猛抗議した。ところが、それをまた好都合と喜んで『親子の確執』と書き立てる始末だ。

シエラは連邦大学惑星についてその事実を知った。知った以上は、どうしてもご両親に会わなくてはならないと思つたと告げて、きっぱりと言った。

「カレンは自殺なんかしていません」

青年も言葉を添えた。

「お嬢さんを思い出してお辛いのはわかりますけど、よかつたら、この子の話を聞いてもらえませんか」

そろそろ北風の厳しい季節である。陽射しはあってもあまり暖かいとは言えない。

いつまでも二人を玄関先に立たせてはおけないと思つたのか、夫人は躊躇いがちに言った。

「……どうぞ、入ってください」

リイは少し離れた場所で、二人がマーシャル家の玄関をくぐるのを見ていた。

最初は別行動の予定ではなかった。自分も一緒に行くつもりだったが、二人が難色を示したのだ。

ルウの言い分は以下の通りである。

「ぼくはシエラの保護者。十三歳の子どもが一人で見ず知らずのお宅を訪ねるのはおかしいもん」

「だったら、おれがいてもかまわないだろう」

別に一緒に行きたかったわけではないが、故意に

「別の意味で目の毒だよ」

広い道路は休日には通行止めになっているようで、フットボールやキャッチボールを楽しむ少年たちや、自転車走らせる子どもたちの笑い声が響いている。遊歩道には休憩用の長椅子や水飲み場があつて、

視線の高さにいろいろな草花の植え込みがつけられ、通りかかる人の目を楽しませる仕掛けになっている。

眼の前の遊歩道に蹴り損なつたボールが飛び込み、リイはそれを拾つて投げ返してやつた。

受け取つた少年は礼を言うのも忘れて、ぽかんと立ちつくした。いつものことなので気にも留めずに、呆氣にとられた視線を横顔に受けながら通り過ぎる。自分の容姿が人目を引く部類に入るということは（不本意ながら）リイにもわかつている。

ただ、まったく自覚がないだけだ。

今日のリイは赤いセーターを着ていた。シェラのお手製である。

よほど近くで眺めてもこれが手編みと気づく人は少ないだろう。そのくらい超絶技巧を凝らしてあり、華やかな赤い毛糸がリイの金髪によく映えている。

これをカレンに見せたいから、一緒にお墓参りに行つて欲しいというのがシェラの希望だったのだ。

正面からゆつくりと高級車が近づいてきた。

通行止めでも、住民の車ならその限りではない。

リイとすれ違つた直後に車が止まり、車から人が降りる気配がしても別におかしなことではない。

だが、その人物は不意に声を掛けてきた。

「ヴィッキー？」

リイは不思議そうに振り返つた。

それは確かに自分の呼び名の一つには違いないが、そこに立っていたのは得体の知れない男だった。

身長は百七十五くらい、痩せていて、猫背気味で、高級車には似合わないよれよれの外套を着ている。

伸ばした長髪はろくに櫛も当てておらず、前髪で眼が隠れて、顔の下半分も無精髭に覆われていて、人相がよくわからない。

初めて見る男なのは間違いなかった。極め付きに怪しくもあるが、敵意は感じなかった。害意もだ。

それを感じ取る直感にリイは自信を持っている。
邪な気持ちを持つて近づいてくるものは瞬時に察することができる。

察することができる。

理屈ではない。本能が見分けるものだ。

野生動物に匹敵するその勘で今日まで生き残ってきたと言ってもいいが、この時ばかりは自分のその勘働きを根底から疑う羽目になった。

「一緒に来てくれ」

ポケットから取り出した男の手には銃が握られ、銃口はまっすぐリイの胸を狙っていたのである。

リイは銃口をまじまじと見つめたまま、微動だにしなかった。

普通の子どもなら命が危険に晒さらされている状況を理解できずに茫然ぼうぜんと立ちつくすか、悪戯いたづらだと思って笑い出すかだろうが、リイに限ってそれはない。

だからといって恐怖を感じたわけでもない。

強しいて言うなら、呆気にとられたというのが一番近かったかもしれない。

なぜなら今は休日の昼下がり、場所は散歩をする人の姿も目立つ遊歩道である。

場所にしても、時間にしても、銃を持ち出すには

極めてふさわしくない。

ここでリイが大声を上げたら（そんな真似をする気は毛頭なかったが、それが自然な反応のはずだ）この男はいったいどうする気だったのかと、銃口を向けられた人間としては極めて冷静に考えていると、男は困ったような口調で言ってきた。

「きみを傷つけるつもりはない。本当だ。頼むから一緒に来てくれ」

声は思ったより若い。顎あごをしやくる仕草だけで、車に乗るようにと促うながしてくる。

それでやつと相手の狙いが飲み込めた。

リイは大真面目に尋ねていた。

「これって誘拐ゆうかい？」

男は負けず劣らず大真面目に頷いた。

「そうだ」

2

休日だったので、マーシャル氏も家にいた。

夫妻の前で、シエラは固い顔つきで当日のことを手短かに語ったのである。

カレンが嘘を吐いて家を出たのは、モデルとしてデビューできる上、有名な娯楽番組に出演できると思ったから、そのために学校を休むことになっても仕方がないと割り切ったからだ。

「人生を変える機会だとカレンは言っていました。そんなふうに向こう見ずなところもありましたけど、彼女は明るくて前向きで、頭のいい人で、家出など決して考えていませんでした。もちろん自殺もです。それだけはお話ししておきたかったのです」

マーシャル夫妻は青ざめていた。夫人は息を呑み、

マーシャル氏は声を震わせながら身を乗り出した。

「その男たちのせいで娘は死んだと言うんですか」

ルウが答えた。

「結果的にそうなります」

「ありがとう。よくぞ知らせてくださった。そんな方法で娘を誘い出したあげく死なせたなんて……」

今すぐ番組を訴えてやると息巻くマーシャル氏に、ルウは首を振った。

「こちらで番組に問い合わせてみたところ、職員と名乗ったその男たちは存在しないそうです」

「何ですと？」

「高校生にはとても人気のある番組のようですから。たぶん、外部の人間が職員を騙ったんでしょうね」

マーシャル氏が真っ赤になった。

「それなら警察に知らせます。犯人の男たちに娘を死なせた罪の報いを受けさせてやる」

ルウは二度首を振った。

「犯人は既に死んでいます。彼らもあの河原にいて

濁流に流されたんですから」

「いいや、そう決めつけることはできないでしょう。この子が助かったように、犯人の男たちもどこかでのうのうと生き延びているかもしれない」

感情的に口にして、マーシャル氏ははつとした。

今の台詞では生き延びたシエラが悪いかのように聞こえてしまうからだ。肩を落とした。

「すまない。きみも大変な目に遭ったのに……」

「いいんです」

静かにシエラは答えた。

この家に来る以上、わかっていたことだ。

うちの娘は死んだのになぜきみだけ生きていると、面と向かって口にした取り乱したりしない分だけ、この人たちはまだ理性的だと好意的に考えていた。

ルウが言う。

「犯人の男たちと思われる遺体も見つかっています。ここからずいぶん離れた海岸に打ち上げられたので、地元の警察はカペット川の洪水とは関連づけて考え

なかつたようですけど、服装からしてその男たちに間違いないと、この子は言ってます」

夫妻に見つめられて、シエラは小さく頷いた。

夫人が嗚咽を堪え、マーシャル氏はやりきれない思いに肩を震わせている。その男たちのせいで娘が死んだようなものだとも知つても、彼らには為す術がない。その男たちが既に死んでしまっているのなら罪を問うことも、敵を討つこともできない。

シエラは軽く頭を下げた。

「お邪魔しました」

ルウも同様にして立ち上がった。

夫妻は二人を玄関まで見送ってくれ、その夫妻を振り返って、シエラは言った。

「わたしはカレンが好きでした」

「……………」

「あの日初めて会って、ほんの二時間くらい一緒にいただけですが、彼女はとてもすてきな人でした。

——残念です。本当に。お悔み申し上げます」

マーシャル夫人は最後に、眼に涙を浮かべながらシエラを抱きしめた。

マーシャル氏もルウと固い握手を交わした。

家を出たシエラはそつと息を吐いた。

夫妻に話した説明は半分は本場で、半分は嘘だ。

カレンがなぜ死んだか、実際には何があったのか、それは言うわけにはいかないことだった。結果的にでたらめを話しに來ただけのようで気が重かったが、横を歩くルウが話しかけてきた。

「来てよかったみたいだね」

「そう思いますか？」

「そうだよ。気がつかなかった？ あの家には他に子どもが二人いるはずなのに、家の中に全然活気がなくて、ご主人も奥さんもひどく暗い顔をしてた」

「カレンの死からまだ立ち直れないのでしょうか」

「うん。だけど、それだけじゃない」

あの自殺説報道が追い討ちになったのだ。

突然娘を失っただけでも大打撃なのに、その娘が自殺だと噂^{はや}立てられて平気でいられるはずがない。

あの子が自殺などするはずはないと思いがらも、カレンが嘘を吐いて家を出たのは確かなことだ。

もしかしたらという疑念は見えない棘^{とげ}のように、夫妻の心に突き刺さって抜けなかったのだろう。

「だからね、今日きみが來たのはあの家族にとっていいことだったんだよ」

この人はこういうことをさりと言う。

こちらを励^{はげ}まそうとしているのではなく、本当に思ったことを口にしていただけなのがわかるので、シエラも素直に微笑して感想を口にした。

「無駄足にならなかったのなら、ほっとしました」それから二人は近くにいるはずのリイを探した。もともと異様なくらい気配に敏感な人である。

二人が用事を済ませて出てくれば、それを察して向こうから出てくるはずだった。

ところが、いくら待っても現れない。

この後はカレンの墓参りに行く予定になっていて、先は一人で行ってしまったとは考えにくい。

住宅地を一回りしてみても、どこにもあの目立つ姿がないことに首を傾^{かし}げて、ルウは自転車^{自転車}の練習をしていた子どもたちに声を掛けてみた。

「きみたち。この辺りで赤いセーターを着た金髪の、とつてもきれいなお姉ちゃんを見なかった？」

本人に聞かれたら瞬殺^{瞬殺}されそうな形容であるが、子どもたちは口々に答えたのである。

「見たよ。車に乗ってた」

「すごく高そうな車だったよ」

ルウとシエラは思わず顔を見合わせた。

最高速度で走る車の後部座席にちょこんと座ったリイは複雑な面持ちでいた。

前席では、あの男が運転している。

車の中には他に誰もいない。リイ自身、縛^{ふさ}られているわけでも口を塞^{ふさ}がれているわけでもない。

ごく普通に車に乗っている状態だ。

銃をしまった男は自分で車の後部扉を開けると、「乗ってくれ」と言ったのである。

車内に誰もいないのは見ればわかるから、リイは念を押す意味で問いかけた。

「ここに乗ればいいの？」

「そうだ。すまないが、しばらくつきあってくれ」

リイは少し考えて、言われたとおりにした。

この男は自分に銃を向けてきた。普段の自分ならその時点でこの男を立派な敵と見なし、問答無用で叩きのめしているところだ。

それをしなかったのは近くに子どもたちや老人の姿があったので、万が一にもその人たちに流れ弾^{だま}が当たるのを避けたかったのが一つ。

もう一つ、意外だったのは、

「傷つけるつもりはない」

と言ったこの男の言葉が、真実に聞こえたことだ。銃を向けながらの台詞である。矛盾^{むじゅん}しているが、

どうも本気で言っているように思えたのだ。

そもそも、この誘拐犯はやることなすこと、実にちぐはぐで奇妙だった。

真つ昼間に人気のある場所で銃などを持ち出して誘拐を執行したこともそうなら、今も攫った相手をまったく自由な状態で車の後部座席に乗せている。

常識的に考えて、こういう場合は攫った子どもに目隠しをするとか、猿轡をかませるとか、その上で手足を縛って後部のトランクに詰めるとかするのが普通ではないのだろうかという考えは考えていた。

以前、犯罪実録で見たことがある。

誘拐事件で重視されるのは犯人の検挙率ではなく、人質の生還率だ。そして、その比率は人質の年齢と密接に関係しており、人質が幼ければ幼いほど高い傾向があるという。

言うまでもなく証言能力の問題だ。

誘拐をビジネスにしている組織の犯行は別として、普通の市民が一攫千金を企んだ場合、自分の人相を

知られるのは絶対に避けたい事態だ。顔を見られた相手を生かしておいたら自分の身が危うくなる。

従って犯人が覆面で顔を隠す、もしくは目隠しをするなどして人質に顔を見せないようにしていれば、人質を生きて返す意思があるものと思ってい。

それを考えると、この男はリイをごく普通に車に乗せて、自分は運転に集中して、後部座席のリイにあまり注意を払っていない。「騒いだら殺すぞ」と脅すわけでもない。殺す気満々なのかと思いきや、完全に自由にさせている。

子ども一人くらいあしらえると思っているのかもしれないが、リイが窓を開けて一声「助けて！」と叫んだらこの男は一巻の終わりなのだ。

おかげで、誘拐されたはずのリイのほうが非常に居心地の悪い思いをしていた。

最初に感じたことでもあるが、自分が抵抗したら、素直に従わなかったら、この男はいつたいていどうするつもりだったのだろうと、逆に興味が湧いてきた。

もつとはつきり言えば、心配になった。

結果として、リイは模範的すぎるくらい模範的な『誘拐された子ども』をやっていたのである。

車は住宅街を離れ、ビジネス街と思われる一角に入っていた。

大通りの両側に高層建築が立ち並んでいる。

男はそのうちの一つの地下駐車場に入った。

入る際に認証が必要な駐車場である。自動機械が車と運転者を認識して初めて入れるものだ。

後ろから見ていたが、駐車場はそう多くない。

そして、駐車位置も決まっていなかった。

男は慣れた仕草で車を止めて、リイを振り返った。

「降りてくれ」

駐車場の奥に歩いていくと昇降機があった。

掌^{てのひら}を当てて個人情報^{個人情報}を照合する形式である。

この建物自体、部外者は立ち入りできないようになってい^なるらしい。

男は五階で降りた。絨毯^{じゅうたん}の敷かれた長い廊下と、

廊下の両脇に並ぶ扉が現れる。集合住宅のようだが、それにしてはどの扉にも表札や名札がない。

かといって、ホテルとも思えない。

受付を通らずに入れるホテルもあるが、未成年と成人男性が同じ部屋に泊まる場合、必ず血縁関係を証明しなければならないはずだ。

しかし、男が個人情報で開けた扉の中は、まさにホテルのようだった。それもかなり豪華な部屋だ。

ゆったりと広く、正面に大きな窓があり、立派な仕事机と椅子が置かれている。床に敷かれた絨毯も照明も、一流の調度品であることがリイにもわかる。

男は扉の鍵を掛けて言った。

「きみのお父さんに連絡を取りたいんだが」

リイは生まれ故郷の惑星ベルトランの現地時間^{現地時間}を思い出しながら答えたのである。

「この時間なら仕事だと思う」

「仕事先の番号を知ってるかい？」

「本人のは知らない。秘書の携帯端末なら」

「それでいい。教えてくれ」

訊かれた通りに答えてやると、男はポケットから携帯端末を取り出して掛け始めたので、リイは眼を丸くした。

二人が今いるのは惑星セントラル。

掛ける先は惑星ベルトランだ。

その間には何百光年という距離が横たわっている。

この両者を繋ぐには恒星間通信機が必要になる。

こんな個人用の端末では相手先を呼び出すことはできないはずだった。

少なくともリイは今までそう聞かされていたが、本当につながってしまったらしい。

その時になって、男はリイを見つめて言った。

「きみは——どっちだ？」

「どういう意味？」

「女の子か、男の子か？」

「男だよ」

すると男は端末に向かって言った。

「V氏の息子を預かった。例のものを用意してくれ。また連絡する」

通信を切った男は一仕事終えたように大きな息を吐いて、リイに笑顔を向けたのである。

「ありがとう。きみが協力的で助かるよ」

『どういたしまして』と言うべき場面なのか否か、真剣に悩んだリイだった。

ヴァレンタイン卿の秘書のジャック・ハモンドは有能な補佐官だった。ただちに行動を開始した。

ヴァレンタイン卿は州知事という要職にある。

幸い急な用件が入るのは珍しくない職業だから、

ハモンドは何食わぬ顔で州議会の本会議場に入って、卿の耳元で「至急のお話があります」と囁いた。

卿は当然、怪訝そうな顔で問い質した。

「何だ？」

「ここでは申し上げかねます……」

意図的に声を低めた秘書の顔つきに、卿も何かを

感じ取ったのだろう。

議長に声を掛けていったん休憩とし、席を立った。議場の外に出て二人きりになって、ハモンドから事情を聞くと、卿の顔色はみるみる青ざめた。

対照的に秘書はあくまで冷静さを保って言う。

「発信元は非表示でした。わたしの独断で通信局に非常時の例外であると伝え、知事の権限で発信先を尋ねたのですが、探知回避措置を取っていたようので、通常の技術ではたどることができないそうです」

「悪戯ではないのか……？」
いたずら

「それなら公衆端末から掛けてくれれば済むことです。わざわざこんな手の込んだ真似をするということは本気であると考えるべきかと思います。——学校に確認してみたところ、ご子息は先程授業を終えられ、お友達と一緒に下校したとの返答でした。もちろん、その時までは何の異変もなかったとのことですよ」

卿は大きく深呼吸して落ち着こうと努力した。

「登下校はいつもスクールバスだ。バスに乗る前に

あの子が誘拐されたというのか？」

「考えにくい状況ですね。下校途中の子どもたちの眼の前で犯行に及ぶとは思えません」

そんなことをしたら大騒ぎになる。

今頃は学校から卿に連絡が入っているはずだ。

「まずはご子息が本当にスクールバスに乗ったのかどうかを確かめる必要があります。乗ったとしたら——これはあくまで最悪の可能性ですが、運転手が犯人の一味であるのかもしれませんが」

そうだとしたら他の子どもたちも危険になる。

「バスの経路はわかっているんだな？」
ルート

「はい。学校側に確認済みです。ただ、このバスには現在地表示機能は備わっていないとのことですよ」

「わかった。州警察に出勤を要請する」

災難だったのはバスの運転手のトム・ホーガンと、卿の次男のチェイニー・ヴァレンタインである。

トムは無事故無違反歴三十年を誇る熟練運転手ベテランで、もう十年、小学校の送迎バスの一台中担当しており、

子どもたちとも顔なじみだった。

この日も安全運転で子どもたちを送っていると、突如として、けたたましい警報サイレンが近づいてきた。

コーデリア・プレイス州は治安のいいところで、救急隊ならともかく、警察車両がこんな勢いで出動することは滅多にない。

何が起こったのだろうかという疑問に思いながらもトムは自然と速度を落とした。警察車両を優先させるのは当然の交通法規だからである。そうしたら後方から猛追してきた十数台の警察車両がバスを包囲して、停止するように指示してきた。

逆らうことなど思いもよらず、指示通りにバスを止めると、武装した警官がわらわらと警察車両から飛び出してきてバスを取り囲んだ。

「扉を開けろ！」

まさかこのバスに爆弾でも仕掛けられたのかと、トムが慌あわてて扉を開けると、乗り込んできた警官の一人がトムに銃口を突きつけて叫んだのだ。

「ハンドルから手を放して両手を上げろ！」

まさに青天の霹靂へきれきだった。トムは呆気あつけにとられて大声で喚わめいたのである。

「な、な、何です、あんたたちは!？」

相手はそれ以上の大声で叫んだ。

「動くな！ 州警察だ！」

座席の子どもたちはみんな啞然おびとしている。

警官たちの剣幕おびに怯えて、泣きそうになっている小さな女の子もいる。

バスの車内に運転手の他に大人の姿がないことを確認すると、警官の一人が鋭く言った。

「チエイニー・ヴァレンタインくんはいるか？」

痛いほど突き刺さる同級生の視線を感じながら、チエイニーが恐る恐る手を上げる。

警官たちは顔写真で彼を確認すると、その身体を引っさげようように抱きかかえた。

「何!? ちょっと待ってよ！」

荷物のように運ばれるのが我慢できずに暴れても、

警官たちはびくともしなかった。

「もう大丈夫だ。今すぐ家に連れて行くからね」

意味がわからなかった。自分は今までにその家に戻ろうとしている途中だったのに、その当たり前のことをなぜこんな大騒ぎにしているのかと思った。

「放してってば！」

力の限りにもがいたが、抵抗空しくチェイニーはバスから連れ出されて、警察車両に押し込められて連行されたのである。

その頃、ヴァレンティン卿は不測の事態に備えて自宅に戻り、卿の妻のマーガレットはこんな時間に戻ってきた夫に驚いて問い質した。

「どうしたの、アーサー。仕事中でしょう？」

「……マーガレット。気を確かに持って聞いてくれ。あまりいい話じゃない」

卿はなるべく妻に動揺を与えないようにしながら、息子の誘拐連絡があったことを告げたのである。

マーガレットの顔からみるみる血の気が引いた。

しかし、彼女がその恐怖から立ち直るより先に、大勢の警官に囲まれたチェイニーが卿の自宅に送り届けられたのである。

マーガレットは無我夢中で息子を抱きしめると、その顔中にキスの雨を降らせた。

卿も大きな安堵の声を洩らした。

「よかった！ 無事だったか！」

「……ちつともよくない」

チェイニーがぶすつと答えるが、今の卿の耳には届いていなかった。満面に笑みを浮かべて警官隊に礼を言った。

「ありがとう！ よくやってくれました」

警官隊も務めを果たした満足感と、最悪の事態を避けられた喜びを顔に表している。

「ご息が無事で何よりでした。他の子どもたちも怪我をしている様子はありません」

「本当に感謝します。運転手の関与は？」

「これから調べるところです」

「父さん！」

ここで我慢できなくなったチェイニーが爆発した。大人の話に口を挟むなど常日頃言われているにも拘らず、十一歳の少年は憤然と叫んだのである。

「わけがわからないよ！　ちゃんと説明して！」

「おまえを誘拐したという連絡があったんだ」

「何を言ってるのさ！　この人たちのやったことが立派な誘拐だよ！　信じられない。無理やりバスを止めて人を引きずり出すなんて！」

母親が優しく息子をなだめた。

「チェイン、落ち着いて」

父親も初めて息子の話を聞く姿勢になった。

「じゃあ、誘拐されたわけじゃないんだな？」

「当たり前だろ！　トムに謝ってよ！」

チェイニーはかんかん怒っている。その怒りは主に父親に向けられていたが、自分の話を無視した警官隊に向けられたものでもあった。

「誘拐なんかされてないって何度も言ってるのに！」

全然聞いてくれない、信じてもくれないんだ！」

ヴァレンティン卿はさすがに気まずい顔になった。

このままでは次男が警察不信に陥りかねない。

咎めるような卿の視線を受けた警官も、決まりの悪そうな顔つきで少年に弁解した。

「すまないね。我々はきみを助けることを最優先に考えたんだ。その……きみ自身が誘拐された事実が気がついていない可能性もあったからね」

少年の頬がますますふくれあがる。

「子どもじゃないんだから。誘拐されてるかくらい、自分でわかります」

チェイニーのこの言い分は正しいとは言えない。

大人でも、顔見知りが犯人だった場合、自分でも気がつかないうちに人里離れた別荘に軟禁されたり、身代金を要求されたりする可能性は充分にある。

経験豊富な警官隊の長はその事実を知っていたが、少年には言わなかった。笑って領いた。

「そうだね。手段が強引だったことは謝るよ」

父親も熱心に言葉を添えた。

「チェイン。州警察の人たちはおまえを助けようとしてくれたんだ。おまえはその行動に感謝しないと
いけないぞ。今回は運良く間違いで済んだが、次に
同じことが起きたら、父さんはまたおまえを助けて
くれと警察に頼む。それが父親の権利だからだ」

少年は何か言おうと開いた口を閉ざした。

恐らくは、大げさだよと言いたかったのだろうが、
父親の表情があまりにも真剣で、決意に満ちていて、
茶化すような言葉は声にはできなかったのだ。
それでも、ここで引き下がっては男が廢る。

「でも、トムは……」

「わかってる。トムには本当に申し訳なかった。
後で父さんがちゃんと謝っておく」

少年はありありと不信を顔に表して言った。

「ほんとだね？」

チェイニーの姉のドミューシアと妹のデイジー・
ローズが庭から入って来た。

部屋の中に警官があふれている光景に、二人とも
眼を丸くしている。

家政婦から詳しい説明を聞くと、ドミューシアは
からかうように弟に話しかけた。

「あんた、誘拐されたの？」

「されてないって言ってるのに！ 明日からどんな
顔して学校に行けばいいのさ……」

どうやら警官にバスから引きずりだされたことが、
少年には非常に『みつともない』汚点であるらしい。

この場には当然、卿の秘書のハモンドもいた。
胸を撫で下ろして卿に話しかけた。

「どうやら悪戯だったようですね」

「まったく、人騒がせな！ あなたたちにもとんだ
ご迷惑をおかけしました」

申し訳なさそうにねぎらいの言葉を掛けられて、
警官隊の長は真剣な顔で首を振った。

「いえ、我々の出番なしに終わればむしろ幸いです。
こちらは州でも指折りの裕福なお宅です。ヴァレン

タイン州知事のご息子が誘拐されたと聞いた時は、我々も大変な事件になると覚悟しました」

ハモンドも警官隊に言葉を掛けた。

「今にして思えば奇妙な連絡でした。V氏の息子を誘拐したとだけしか言いませんでしたし、具体的な金額も要求してきませんでしたから」

ここで衝撃と喜びから立ち直ったマーガレットが、訝しげに口を挟んできた。

「息子を誘拐したと言ったんですか？」

「はい、奥さま」

「チェイニーを誘拐したとは言わなかった？」

「ええ、それが何か？」

ヴァレンタイン卿夫人は、ちよつと考えていたが、躊躇^{ためら}いがちに夫に話しかけた。

「ねえ、アーサー」

「なんだい？」

「その息子って、リイのことじゃないのかしら？」

卿は驚愕^{きやうがく}のあまり眼を剝^むいた。

「エドワードを誘拐!!」

卿だけでは無い。卿の息子も二人の娘も、大きく眼を見張って絶句している。

「いいや、マーガレット。それはありえない。あのエドワードだぞ。いったい、どこの誰がどうやってあんなものを誘拐できるといふんだ？」

実の父親が顔をしかめながらきつぱり断言すれば、実の母親も負けず劣らず真剣な顔で頷いた。

「わたしもそう思うけど、あなたの息子はあの子とチェイニーの二人でしょう。犯人はあなたの息子を誘拐したと言ったのだから、チェイニーが無事なら攫^{さら}われたのはリイしかないと思うのよ。それとも――」

彼女は実^{むじや}に無邪氣^{むじや}に夫に問いかけた。

「あなた、他にもどこかに息子がいるの？」

「マーガレット……」

卿は思わず頭を抱えたが、州警察の面々は緊張の面持ちで卿に問い質した。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。